

「大正時代 公文書でたどる百年前の日本」
(2023・7・22～9・18 国立公文書館)



国立公文書館。研究者か好事家でなければ馴染みのないところである。今般、企画展示「大正時代 公文書でたどる百年前の日本」を見る機会があった。天皇が署名した法律の原本や行政書類の現物などである。

例えば、大正への改元では「改元の詔書」の天皇ご署名原本に、「枢密院会議筆記」が並べて置かれ、満場一致で議決されたこと、元号案に「大正・天興・興化」の三案のあったことが記されている。関東大震災では「帝都復興計画案の大綱」の閣議決定の文書の隣りに「帝都復興院事務経過」が置かれ、復興計画案の帝国議会議決で大幅に予算削減になった経過が記されている。常設展の「堪え難きを堪え忍び難きを忍び」の文言で知られる「終戦の詔書」には、書かれた文字を削って消し、その上に清書し直したり修正文字が小さな文字で書き足されており、政府の切羽詰まった様子が読み取れる。歴史資料のもつ重みが伝わってくる。今回、展示を見て一見とつきにくい公文書や行政資料に、少し親しみを感じるようになった。

(藤岡嘉明)

絵本『狐』 新美南吉・作 長野ヒデ子・絵
(偕成社)



新美南吉の「狐三大話」といわれる三作のうち、『こん狐』「手ぶくろを買いに」はよく読まれているけれど、あまり知られていない『狐』に母子の強い愛と絆を読んだ。

主人公は初等科三年生の文六ちゃん。母は仲間に文六と遊んでやってといても頼みます。夜に新しい下駄をおろしてコンと咳をしたばかりに狐に憑かれたと仲間外れにされ、狐に憑かれたのではと恐くなった文六は、僕が狐になったらどうすると母に聞くと、文六が狐になったらこの世に何の楽しみも無いから母も狐になる、獵師に見付かったら囮になって文六を逃がすと言います。それではお母さんがいなくなると泣きじゃくる文六を母は抱きしめます。

南吉は四歳で生母を亡くし継母に育てられた。幼い南吉は継母の膝に凭れて眠るほど仲が良く、継母は南吉が喧嘩した相手に仲良く遊んでやってと頼んだ。まるで文六ではありませんか。二十九歳で亡くなる二カ月前に書き上げた『狐』は亡母への思慕と、継母との懐かしい思い出かもしれません。

(吉本由美)